2021年度メセナアソシエイトレポート

戦後日本写真の振興に企業メセナが果たしてきた役割
―株式会社ニコンと富士フイルム株式会社の事例から

小島ひろみ

目次

０ はじめに　研究概要　2

１ 戦後日本写真の振興　4

２ 株式会社ニコンと富士フイルム株式会社　企業事例考察　7
　2-1 株式会社ニコン　7
　2-2 富士フイルム株式会社　10

３ 二社の事例から、まとめ　14

別紙資料　17
ニッコールクラブの会長・幹事・顧問の変遷　17
「伊奈信夫賞」受賞者一覧　18
「三木淳賞」受賞者一覧　20
富士フイルムフォトコレクション　21
「写真新世紀」過去の受賞者・審査員一覧　22

参考文献　24

0. はじめに　研究概要

写真史の起源はカメラ・オブスクラの誕生に遡るが、写された像を製版・定着させるための研究を重ねたフランスのニセフォール・ニエプスが世界初の写真術であるヘリオグラフィを発明したのが1824年頃、一般への普及ではフランスのルイ・ダゲールによるダゲレオタイプの発明が1839年、現在の写真技術という観点ではイギリスのウイリアム・ヘンリー・タルボットによりネガポジ法（カロタイプ）が発明（特許取得）された1841年が起点となる。そして、アメリカのイーストマン社が「コダック」という名のロール式フィルムを開発・発売するのが1888年である。そこから現代に至るまで、写真が人々の生活、社会や情報伝達に果たした役割や影響は計り知れない。35mm小型カメラの誕生を経てデジタル技術の開発、色調においてはモノクロームからカラーといういくつかの大きな主流の転換期を経て現在に至るが、「写真」と一言では表せないほどその定義や意味は幅広く、その技術や概念は時代とともに大きな変化を遂げてきた。社会的な記録のメディアとしての報道、広告、芸術表現、そして個人的な思い出の記録に至るまで、また写真家の定義もプロフェッショナルからアマチュアまで千差万別でかつ幅広い。日本のカメラ・写真市場の大きな特徴と言えるのが、報道や広告を中心とするプロフェッショナルユーザーだけではなく、幅広い層のアマチュアユーザーの市場が存在することである。その層の中でも最新機材を日々研究し、芸術志向の表現を追求するヘビーユーザーは高品質・高価格の一眼レフカメラのコアユーザーであり、多くのカメラ雑誌のターゲット層でもあった。アマチュア層とそれに向けたサービスを提供し続けてきたカメラ・フイルムメーカーが相互に深く関わり合い、日本独自の写真文化が発展してきたといえる。

大きな転換期は2000年前後、デジタル技術の台頭である。かつての一眼レフカメラのヘビーユーザーの年齢層は20～40代でほとんどが男性、市場は新規客層を大きく開拓できないまま顧客がさらに高齢化する。コンパクトカメラ市場は若年層や女性の新規客層を開拓するが、スマートフォンの出現がカメラ市場を大きく揺るがす。特に2007年のiPhone発売は世界に衝撃を与え、これまでの写真を媒介とするコミュニケーションのあり方やカメラの概念を根底から覆した。デジタル化の波と共に展覧会・紙媒体（写真集・カメラ雑誌など）中心の発表の形式を大きく変え、雑誌の休刊・廃刊が相次いだ。新規開拓されたコンパクトカメラ市場は、スマートフォンに大きなシェアを奪われる。

写真技術が誕生してから200年にも満たない期間の中で、写真は劇的な進化と変化を遂げてきた。そして現在、ほぼ誰もがスマートフォン（＝カメラ）を携帯し、写真を撮る、見る行為は完全に日常となった。それを加速させたのは紛れもなく、2000年前後に起きたアナログからデジタルへの転換期である。人々の写真に対する概念そのものをも大きく変化させ、また、それに伴うビジネスの潮流も激変し、関連企業は大きな変革を迫られた。つまり各時代における写真のあり方は、時代そのものや社会情勢、人々のニーズや意識を端的に表す指標であるともいえる。世界の中の日本において、「写真」というものが時代とともにどのように扱われどのように変化してきたか、その振興と変遷に企業がどのような役割を果たしてきたか、また、それは今後どのように変化していくのか。世界的な新型コロナウイルスのパンデミックの中で、映像の扱われ方や存在価値も日々めまぐるしく進化と変化を遂げている。ここにおいてそれらの変遷を振り返り、今後どのように写真の立ち位置や可能性が変化していくのかを写真の振興と変革に大きな役割を果たしてきた企業メセナという観点から検証してみたい。その行為は、世界レベルでのパラダイム・シフトが起こりつつある今、今後を考えるためのひとつのヒントをもたらすものになり得るのではと考えている。

時代は戦後以降とし、第一章では戦後日本におけるカメラ・フィルムメーカーのメセナを中心とした写真文化の振興のための活動を振り返る。第二章では、具体的な企業メセナの事例として、日本を代表するカメラメーカーであり日本の写真界のメセナ活動を牽引してきた株式会社ニコン、フィルムメーカーとして世界をリードしながらその事業構造の転換にも注目が集まる富士フイルム株式会社の二社の活動に焦点を当てる。インタビュー調査にて、二社のメセナ活動が日本の写真文化にもたらした影響を振り返りながら、新たな時代における写真、企業のありかたや可能性について考察する。

なお、各企業へのインタビューは以下の日程で実施した。

・2021年10月26日(火)　インタビューとニコンミュージアム見学
株式会社ニコンイメージングジャパン (東京都品川区)
　カスタマーリレーションズ本部 副本部長 森 真次様
　フォトカルチャー推進部 ゼネラルマネジャー 浅見 舞様

・2021年10月27日(水)　インタビューとFUJI FILM SQUARE見学
富士フイルム株式会社（東京都港区）
　コーポレートコミュニケーション部
　宣伝グループ　　マネジャー 間瀬紀美子様
　　マネジャー 大前誠人様
　　シニアエキスパート　砂屋敷真衣様
　　島田知明様
　　吉村絵梨香様
　　寺島浩岳様

担当者各位にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。

1．戦後日本写真の振興

世界でも特有の日本のカメラ文化の発展は、カメラ・フイルムメーカーの貢献に寄るところが大きい。かつてはドイツやアメリカが映像産業の先進国であったが、1960年代以降、日本はカメラの製造において世界を完全にリードしていた。ニコン、富士フイルム、キヤノン、オリンパス、ペンタックス、ソニーなど高品質のカメラ、レンズ、フィルムを製造する企業が、日本製の製品の質と需要を世界的に高めていった。日本のカメラ文化における特徴の一つは、アマチュアカメラマンの人口と層の厚さであるが、各メーカーが鎬を削り、質の良い製品を手の届く価格で大量に生産する体制を整えたことが、1950年代半ばの戦後（第二次カメラブームと呼ばれる）のカメラブームに繋がったとも言える。そして、60年代に差し掛かるあたりまでに、写真界という構造が戦前のものとは異なった形で明確に形成されることになるのである。[1]

アマチュア（写真愛好家）の写真熱を支えたのは写真雑誌、写真コンテスト、そして日本各地に多数存在するカメラクラブである。コンテストを目指しての技術取得や製品などの情報交換、撮影会や研究会での交流を通してアマチュアの熱気は活発化し、また、カメラ雑誌や企業によるギャラリーが、戦後写真家の活動、作品発表の主な場でもあった。カメラ雑誌が設定した「月例」と呼ばれる「月例懸賞写真」は、アマチュアの創作意欲を高める存在であり、長年、プロへの登竜門的な役割も担っていた。戦後、土門拳や木村伊兵衛の提唱した「リアリズム写真」が全盛となるが、1957年、写真評論家の福島辰夫が組織し、銀座・小西六ギャラリーで写真展「十人の眼」[2]が開催される。[3] 同展は翌年1958年、1959年と3回にわたって同じ小西六ギャラリーにて開催され、終了後、細江、奈良原、東松、川田、丹野、佐藤の6人によってセルフエージェンシー「VIVO」が結成される。彼らが目指した表現は、従来の報道写真的なリアリズムを超えた全く新しい感性と方法論に基づいた「パーソナル・ドキュメント」であり、次世代の写真家に強烈な影響をもたらした。重要な点は、戦後日本写真の歴史的転換期とも言える展覧会が開催されていた、すなわち当時の日本写真界を牽引していたのが美術館などの公的施設ではなく民間企業のギャラリーであったことだ。

各企業がプロの写真家の育成や発表の場を提供した功績は大きい。欧米各国では、美術館や大学という専門機関が頂点となるヒエラルキー構造であることに対し、日本においては「写真美術館」がまだ存在せず、また美術館においても写真の専門家が少ないという環境の中で、プロの写真家にとっては主に写真雑誌や写真集、そして企業のギャラリーが作品発表や批評の主な場所であった。重要な写真賞の設立にも企業が大きく関わっている。

戦後における企業による写真文化の振興のための主な活動内容を下記①～⑤に記していく。

①カメラ雑誌

1949年「アサヒカメラ」復刊（創刊は1926年、1942年に一時休刊）、1954年「サンケイカメラ」と「カメラ毎日」が創刊。新聞系列のカメラ雑誌の他に1946年に「CAMERA」復刊（1921年「カメラ」創刊、「芸術写真研究」「カメラマン」吸収合併、「カメラクラブ」「写真サロン」統合、1941年に「写真文化」・1943年「写真科学」と改名。1945年一時休刊）、1951年創刊「日本カメラ」、「フォトアート」など。プロ写真家の作品を紹介するグラビア、国内外の写真界動向、写真評論、製品紹介、月例コンテストなどインターネットのない当時の貴重な情報源であった。また、カメラ雑誌の月例写真コンテストはアマチュアの研鑽の場であると同時に、プロへの登竜門という役割も担っていた。

②カメラクラブ・団体（全国紙・新聞社ほか）

1950年設立の「日本写真家協会」はプロの写真家組織だが、アマチュア写真家や関連企業にも対象を広げた組織も存在する。1952年発足の「日本写真協会」はカメラ産業の海外進出、国際親善の推進を目的に外務省の認可の下発足、現在では主に写真文化の発展のために寄与する団体である。1926年創

---

[1] 『ニッコールフォトコンテストのあゆみ』柳本尚規「アマチュア写真をふり返る」 p.176 pp. 13-18 渡辺勉氏は「フォトアート1964年5月号」の「戦後から現在までの写真界を語る」と題した林忠彦、永井嘉一との対談の中で、「この時期になってプロとアマチュアの中間的存在がなくなり、商売に徹する人はそうなり、なお写真の好きな人はアマチュアの道を進み、プロはその自覚を持つようになった」と語っている。

[2] 石元泰博、川田喜久治、川原舜、佐藤明、丹野章、東松照明、常盤とよ子、中村正也、奈良原一高、細江英公の10名

[3] この展覧会に繋がったきっかけの一つは前年1956年に銀座　松島ギャラリーで開催された奈良原一高のデビュー作「人間の土地」展である。当時無名だった奈良原による既存の枠組みを逸脱した全く新しいドキュメントの在り方は多くの写真界の重鎮や批評家たちには受け入れられず、批判の的となった。

設の「全日本写真連盟（AJAPS）」は朝日新聞社後援団体で全国に支部がある。読売新聞、毎日新聞関連の団体も存在。大小問わず、地域のカメラショップ主催やサークル規模の会から全国規模のカメラクラブまで、膨大な数のクラブ・団体が活動していた。

③カメラクラブ・団体（カメラ・プリント・映像関連メーカー）

各メーカーが主催する愛好者のためのカメラクラブが多数誕生し会員のために新製品の告知、コンテスト情報などを掲載する会報誌が発行され、さまざまなサービスを通してロイヤリティを形成した。
1950年、千代田光学（ミノルタ）主催の「ミノルタファミリー」「ミノルタニュース」1950年、マミヤ光機（マミヤOP）「マミヤカメラクラブ」「Mamiya CIRCLE」
1952年「ニッコールクラブ」発足、1953年から会報誌「NIKKOR」（現ニッコールクラブ会報）
1954年「キヤノンクラブ」発足、1959年から「キヤャノンサークル」発行
1956年「コニフォトクラブ」結成「コニフォトニュース」→1961年「サクラファミリークラブ」「SAKURA FAMILY」→1987年　社名変更「コニカフォトクラブ」「PHOTO KONICA」
1956年　高千穂光学（オリンパス）「オリンパスカメラクラブ」「OLYMPUS Photography」
1967年　コムラー「コムラーフォトクラブ」「Komura's eye」発行
1968年　旭光学「ペンタックスファミリー」「PENTAX FAMILY」
　　ブロニカカメラ「ブロニカクラブ」「BRONICA CLUB」発行

④フォトサロン、ギャラリー（カメラ・プリント・映像関連メーカー）

メーカーによって運営されるサロン・ギャラリーのおもなものに下記が挙げられる。

1954年「小西六フォトギャラリー」（東京・銀座）開設、1988年改称・移転「コニカプラザ」（新宿）、2003年改称「コニカミノルタプラザ」、2017年閉館

1957年「富士フォトサロン」（東京・銀座）開設、2007年「フジフイルム スクエア」（六本木）開設。「富士フォトサロン」から改名した「富士フイルムフォトサロン」に加え、「写真歴史博物館」等を併設。 ※大阪、札幌、名古屋に「富士フイルムフォトサロン」

1967年「ペンタックスギャラリー」（東京・六本木）開設、1981年「ペンタックスフォーラム」（東京・新宿）開設、「リコーイメージングスクエア」（東京・銀座）開設、新宿に移転、2021年「リコーアートギャラリー」（銀座）開設

1968年「ニコンサロン」（東京・銀座）開設、1971年「新宿ニコンサロン」開設、1974年「大阪ニコンサロン」開設、2017年「新宿ニコンサロン」終了、銀座・大阪2か所に、2020年「大阪・銀座ニコンサロン」終了、新宿に「ニコンサロン」を再開

1973年「キヤノンサロン」（東京・銀座）開設、2003年「キヤノンサロンS」（品川）開設、2005年改称「キヤノンギャラリーS」　※大阪に「キヤノンギャラリー」

1975年「ミノルタフォトスペース」（東京・新宿）、閉館

1979年「ナガセフォトサロン」（東京・銀座）、「コダック・サロン」改称

1979年「オリンパス・ギャラリー」、1997年「オリンパスプラザ」（東京・神田）開設、2022年改称「OM SYSTEM PLAZA」新宿に移転。 ※「OM SYSTEM GALLERY」（大阪）

1983年「コンタックス・サロン」（東京・銀座）、2005年移転（有楽町）、2009年閉館

2014年「ソニーイメージングギャラリー」（東京、銀座）開設、2016年ソニービルから「銀座プレイス」ビルに移転

⑤写真賞

おもにプロ写真家を対象とする写真賞として「木村伊兵衛賞」（朝日新聞　1975年）、「土門拳賞」（毎日

新聞　1981年～）、「林忠彦賞」（現・周南市文化振興財団　1991年～）、1964～1999年「太陽賞」（平凡社）、「日本写真協会賞」（1952年～　日本写真協会）、「東川賞」（1985年～北海道上川郡東川町が開催）などがあげられるが、企業がメセナ活動の一環として設立したいくつかの賞は写真界において非常に重要な位置を占める。ニコンの「伊奈信男賞」（1976年～）・「三木淳賞」（1999年～）、キヤノンの「写真新世紀」（1991～2021年）、富士フイルムの「富士フォトサロン新人賞」（1999～2009年）など、過去の受賞者をみても、日本の写真界を牽引する、または次代を担うであろう写真家が多数受賞していることがわかる。

キヤノンの「写真新世紀」は、2021年度をもって終了したが、デジタル・テクノロジーによって写真表現とそれを取り巻く環境が激変した2000年代において、その時代ならではの写真家の輩出において功績を残した。過去の審査員・受賞者リスト（別紙5）は流行り廃り含め強く時代を反映しており、デジタル時代への転換期におけるひとつの歴史的な賞に位置づけられる。分岐点と言えるのは、賞における「写真」の定義が本来の「シリアス・フォトグラフィー」（作品としての写真）というよりもむしろアートマーケットやコマーシャル界に親和性のある人選に一部傾倒していったこと、そして、時代の流れに沿う半ば観念的な形で「映像（動画）」を「写真」の範囲に含める動きが前面に出てきたことではないだろうか。映像をめぐるメディア環境や人々の意識の劇的な変化の中で、もはや賞として「写真」に主軸を置くことが難しくなったようにも見える。しかしながら、映像を含めた写真のあり方そのものが多様化し、もはや従来の写真賞の概念では捉えることの限界も見え始めた現時点で、一旦これまでの流れを完結させ、新たな賞のあり方を模索するというその決断には賛否あるものの、今後の展開如何とはいえ更なる期待を込め、むしろ英断と見ることもできる。

2. 株式会社ニコンと富士フイルム株式会社　企業事例考察

写真文化の広がりと変遷は、常にカメラ技術の進化・変化と共にあったと言える。中でも、日本のカメラ・フィルムメーカーの開発力・技術力は世界的に見ても、写真文化の発展に重要な役割を果たしてきた。カメラ・フイルムメーカーの活動の歴史を振り返ることは、日本における写真の動向を探るにあたり不可欠である。その中で、まだ日本に「メセナ」という概念が確立するはるかに前から、企業として写真文化を支えるための活動を長期にわたり継続しており、またその活動が戦後日本の写真文化に多大な影響を与えてきた二社、カメラメーカーである株式会社ニコン、フィルムメーカーの富士フイルム株式会社の活動に焦点をあてる。デジタル社会の到来とともに大きな転換期にある写真–今後のビジョンを考察するためにも、二社の戦後間もなくから現在に至るまでの写真文化の発展に貢献する活動の変遷を振り返ってみたい。

2-1. 株式会社ニコン

①ニッコールクラブ（1952年～）
②ニッコールフォトコンテスト（1952年～）
③ニッコール会報（1953年～）
④ニコンサロン（1968年～）
⑤「伊奈信男賞」（1976年～）・「三木淳賞」（1999～）
⑥ニコンミュージアム（2015～）

株式会社ニコンは1917年東京計器製作所と岩城硝子製造所、藤井レンズ製造所の三社が合同し、岩崎小弥太率いる三菱合資会社の出資により、日本光学工業として東京に設立された。戦時中は日本最大の光学機器メーカーとして、おもに軍需品の製造をしていたが、終戦後は軍需から民需への転機を図った。戦後、日本に上陸した進駐軍によってカメラと写真の一大ブームが起こり、カメラボディの開発と製造を開始する。礎となったのは1932年に誕生した「ニッコールレンズ」である。戦後の不況により経営状況は厳しい状態が続いていたが、創設者社長の長岡正男は技術者でもあり、ニッコールレンズの素材である光学硝子は長岡が自ら手掛けたものである。自社製レンズの性能に強い自負を持ち、新しいアイデアを採り入れながら会社の運営を堅実に進めていた。大きな転機となったのは、1950年である。4月下旬、「ライフ」の写真家デイヴィット・ダグラス・ダンカンが来日し、ライフ東京支局の三木淳がそのアシスタントを務めた。その際に、三木が試し撮りとしてニッコールレンズで撮影したダンカンのポートレートのプリントのシャープな描写性にダンカンが驚き、社長・長岡のもとを三木とともに訪れる。当時は日本のプロの写真家でさえもライカ、コンタックスを使用、ドイツ製以外はレンズにあらず、日本製など論外という時代であった。同年6月、朝鮮戦争が勃発、前線に赴くダンカンが携えたのが2台のライカⅢfに装着したニッコールレンズ（50mmF1.5, 135mmF4）であった。ダンカンの撮影した写真は「ライフ」のニューヨーク本社に送られ、そのフィルムを現像した本社が、35mmとは到底思えないほどのシャープな描写力に驚愕し、ニコンのカメラを150台購入するにまで至った。「ニューヨーク・タイムズ」にもレンズを称賛する記事が掲載され、一気に世界的な評判が高まる。

①ニッコールクラブ（**1952**年～）

ニッコールレンズの評価が高まり会社の経営が安定したことで、レンズ愛用者ひいては社会に報いるための社会貢献の形として、社長の長岡と三木の考えで1952年に創立されたのが「ニッコールクラブ」である。現在に至るまでニコンのメセナ活動の礎となっているこのクラブが生まれたのは終戦からわずか7年後、まだ「メセナ」という概念さえもない時代である。クラブは、ニコンのカメラ、レンズ愛用者の相互親善と国際的な写真団体との交流を目的とした団体であり、会報誌発行、会報フォトコンテスト開催、フォトセミナー開催、撮影会やゼミ開催、全国各地に約100支部ある支部活動など、長期的かつ広範囲での活動が継続されている。一番の特徴は、運営組織が長年社外のメンバーで構成されてきたこと（別紙1）、会社がクラブの存在を売上向上に利用するのではなく、商売とは切り離し運営には介入しない、独立主体として持続するものであるべき、という重要な方針は設立時から長きにわたり貫かれていた方針である。
1952年設立時の発起人は54人、ニコンの長岡正男社長はじめ関連会社、新聞社関係者、三木淳の人脈を駆使して協力を仰いだ土門拳、亀倉雄策、木村伊兵衛、海外からはマーガレット・バーク＝ホワイト、デイヴィッド・ダグラス・ダンカン、アンリ・カルティエ＝ブレッソンら写真家たち、さらにイサム・ノグチ、女優

の高峰秀子、映画監督の溝口健二、ノーベル賞受賞者湯川秀樹博士など国際色豊かなメンバーが名を連ねている。
クラブの特色の一つに撮影会が挙げられる。講師には現役で第一線で活躍するプロの写真家陣を迎え、的確で細やかな指導が行われる。また、海外での大規模な撮影会はアジア・太平洋地域を中心に行われ、100名を超ええる会員がニコンのカメラとともに赴くことで、写真を媒介とした各国との友好・交流のみならず「メイド・イン・ジャパン」のイメージアップ、民間の親善大使のような役割も担うことになる。日本を代表する写真集団のクラブ会員はニコンの発展とともに増加し、発足50年の節目である2002年の時点で登録会員は約21万人、日本国内・海外支部数は96（2002年9月時点）であった。なお、2021年度より、ニコンイメージングジャパン社内にて運営、ニッコールクラブ顧問は2021年度よりニッコールクラブアドバイザーになっている。この変革が今後どのように作用するのかは着目すべき点である。

②ニッコールフォトコンテスト（**1952**年～）

③に挙げる会報「NIKKOR」創刊号からコンテストに多くのページ数を割き、時代ごとに高いレベルの作品を審査、紹介してきた。ニッコールクラブ創設とほぼ同時に開始された「ニッコールフォトコンテスト」はニッコールクラブの最大の実績のひとつである。プロ・アマチュアを問わず、誰でも参加できるフォトコンテストとして、過去69回（2021年12月時点）開催されているが、毎回多くの優れた作品が発表されている。コンテストはアマチュアの中でも最高峰といえる地位を確立している。また、毎年1回のニッコールフォトコンテストの他に、会員の勉強の場として「サロン・ド・ニッコール」（1964年～）が実施されている。会報の発行に合わせて年4回、募集告知とともに選考された作品が掲載される。審査に合格した作品にはすべて選評が付き誌面に掲載され、上位作品はニッコールフォトコンテストの審査対象にもなる。入賞を目指す年一回のコンテストとは若干趣向の異なる、作家性やテーマ性に重きを置いた作品も多く集まり、写真の技術向上や修練・勉強の場を提供している。
複数の主軸を持ちながらもいずれもコンテストとしての高いレベルの維持、権威付けができた理由は、木村伊兵衛や土門拳といった日本のトップレベルのシリアス・フォトグラファーが審査に関わり、高いレベルの目で審査が行われてきたことにある。その姿勢は他のメーカーから確実に一歩抜き出ていた。さらに、当初から「シリアス・フォトグラフィー」を追求してきた写真家たちが中心となって会を運営してきたことで、アマチュアの写真だが、プロと同等あるいはプロにも撮れない作品をいかに見つけるか、という志を持って真剣で熱心な審査が行われている。一見わかりにくいが、確固たるコンセプトを持ったシリアスな作品を中心にしっかりと評価をしてきたこと、さらには貫かれてきたスナップショットの伝統が、ニッコールフォトコンテストの歴史の揺るぎない礎として存在している。高いレベルのコンテストへの意欲を通して各支部が活性化、指導者も学習を重ねながら新たに支部が生まれていき、裾野の幅も広がっていく。それらはニコンのカメラ販売が拡大していくプロセスと重なっていた。時代とともに写真を取り巻く時代背景は変化し「ネイチャー（自然・動物写真）」「風景」写真の急増、また近年は非常にコンセプチュアルな作品も増えてきており、コンテストの部門も時代に合わせて変化が加えられている。

③会報誌「**NIKKOR**」(現「ニッコールクラブ会報」)（**1953**年～）

1953年、会員と事務局とをつなぐ役割として会報が発行される。1953年に発行された「NIKKOR」No.1から1956年のNo.6まで続いた後、「ニッコールクラブ会報(NIKKOR CLUB)」と名称を変更し現在まで継続している。創刊号からの内容は現在の会報と基本的な部分は変わらない。コンテストを主軸としアマチュアを高いレベルで育成するという基本方針は当初から確立しており、一方でプロの作品、テキスト、製品情報などがバランス良く掲載されている。「創刊号」[4]にはマーガレット・バーグ＝ホワイトの作品が掲載されており、会報編集委員には木村伊兵衛、土門拳、西山清、亀倉雄策、尾崎三吉、三木淳が名を連ね、世界基準の高いレベルで創刊号をスタートさせたことがうかがえる。日本を代表するデザイナーである亀倉雄策が創刊号から企画・編集に関わっており、その表紙デザイン・構成などの完成度の高さは「ニッコールクラブ」の目指す高い水準のビジョンに大いに寄与したといえる。経営が安定し、クラブの経営も軌道に乗ってきた1964年、亀倉による新しいロゴタイプが採用される。装飾文字が全盛であった当時では考えられなかった小文字のみのシンプルで斬新なデザインは現在まで受け継がれている。なお、亀倉は会報以外にもニコン製品のパンフレットなどの印刷物も手がけていたが、直線を多用した格調高く

[4] 「創刊号」の定義は二つあり、”創刊号”から6号まで続いた「NIKKOR」は通巻と別のものという扱いもあるが、ここでは「NIKKOR」No.1を「創刊号」と定義。（『会報でひもとくニッコール物語』p.11」）

存在感のある「ニコンF」のボディデザインは歴史に残る名作である。

④ニコンサロン（**1968**年～）

日本光学の創立50周年を記念して、1968年1月に「ニコンサロン」が銀座に開設された（現在は新宿に統合）。続いて1971年6月に「新宿ニコンサロン」、1974年3月に「大阪ニコンサロン」を開設し、「写真文化の向上に寄与する」ことを目的に、プロアマ問わず数々の写真展を開催してきた。開催された写真展は4000回以上、その影響力と存在感は写真界トップレベルであり、それらの成果は国内のみならず海外からも高い評価を得ている。ニコンサロンの運営は発足当初から株式会社ニコンから委嘱した社外の写真家・評論家によって構成されたニコンサロン運営委員会によって行われる。年間6回、自由応募の作品を運営委員によって選考、それらの作品展示が開催される形式である。

ここにおいても重要な点は、ニッコールクラブの運営同様に審査委員を外部に委託し、会社の志向や利益とは完全に一線を引いてギャラリーが運営されているところにある。また、コンテストと同様「シリアス・フォトグラフィー」に重点を置き、若い作家の発掘・展示とともに、史実的価値の高い日本写真史において重要な作家の展示が1970年代に頻繁に行われたことも重要な点である。2代目ニッコールクラブ会長でありニコンサロン運営委員であった木村伊兵衛らの尽力が大きいが、同時に世界的な視点で1972年にはアルフレッド・スティーグリッツのオリジナルプリントによる展覧会も開催されている。[5] 伊奈信男は70年の「ニッコールクラブ」本誌において、日本の「文化施設にいたっては、非常に立ち遅れている」と写真史において重要な作品のオリジナル・プリントを体系的に収集・保存・展示する場所が存在しないことを指摘している。[6] 同時代のこういった様々な活動が「写真美術館構想」[7] の動きに繋がっていったのである。

開設から半世紀が経過し、写真を取り巻く環境は激変している。2017年、ニコンプラザ新宿に「THE GALLERY 」がスタート（新宿ニコンサロン終了）、2020年には銀座ニコンサロンが終了し、ニコンプラザ新宿にニコンサロンが復活する（THE GALLERYは半分に）。高い水準を守り、歴史を継承しながら新しい地位を確立していくための様々な試みが行われている。なお、ニコンサロンの活動は2010年にメセナアワードを受賞している。

また、「ニコンサロンブックス」は写真集は勿論、伊奈信男の『写真に帰れ』（2005年刊行。表題は1932年に「光画」に発表された論文であり、日本近代写真批評の発端とも言われる。）といった重要な評論まで幅広い充実したラインナップで、商業出版とは一線を画した貴重な写真資料が書籍化されている。

⑤「伊奈信男賞」（**1976**年～）・「三木淳賞」（**1999**～）

1976年から、ニコンサロンにおける年度賞として設定。前年10月から翌年9月までにニコンサロンにて開催された展示の中から最も優れたものに授与される。プロ・アマの区別なく、純粋に「シリアス・フォトグラフィー」の可能性と水準、時代性などを提示しているかが問われる。ニコンサロン運営委員会は、ニコンサロンが単なる作品発表の場所に留まるのではなく、写真文化へのさらなる向上と発展に貢献することを目的に、ニコンサロンで発表されたその年の全作品の中から最も優れた作品一点を選び「伊奈信男賞」を贈呈することを1976年に決定した。（過去受賞者リスト 別紙2）写真評論家として日本の写真文化に多大な貢献をした伊奈信男（1898年～1978年）の名を冠した同賞は、日本における三大写真賞とも一説においては定義されており、ニコンサロンの高い水準を保つことのみならず、写真文化の振興、プロの写真家の評価確立のための大きな役割を担っている。また、1986年から採用された「伊奈信男賞特別賞」という表彰制度は、ニコンサロンにおいて過去10回の写真展を開催した作家を対象にその実績を称えることを目的に制定された。

さらに、1999年から若手作家の活動支援を目的として、35歳以下の若手写真家から選出する賞として「三木淳賞」を創設（過去受賞者リスト 別紙3）。2017年からは若手写真家育成プログラムとして「Juna21」を発展させた「Be a Photographer」を開始、新たな取り組みで若手作家の発掘支援にも取り組んでいる。

---

[5] 72年には、東京国立近代美術館に寄贈（56年）された26点のオリジナル・プリントによる「近代写真の父アルフレッド・スティーグリッツ作品展」（銀座）も開催されている。（『写真展案内はがきで綴る半世紀』鳥原学「ニコンサロンの半世紀」p.11 pp.25-28）

[6] 前掲書5 pp.42-45 さらには「スティーグリッツ展の貴重なオリジナル・プリントも東京国立近代美術館ではいまだ資料としての扱いにとどまっていたものだった。」

[7] 日本において写真を専門的に収集・研究・保存・展示する美術館の設立の動きが具体化するのは、1980年代後半から1990年代前半である。1968年に「写真100年 日本人による写真表現の歴史」展開催後、1979年、日本写真家協会を中心とした「日本写真美術館設立促進委員会」が発足。MoMAの写真部門などの先行事例を参考にし、1988年に川崎市市民ミュージアム、1989年に横浜美術館が写真部門を設立。そして1990年に写真専門の美術館として東京都写真美術館が開館する（全面開館は1995年）。

⑥ニコンミュージアム（**2015**年～）

ニコン創立100周年を記念し、本社のある品川インターシティにオープンしたミュージアム。ニコンの歴代商品と技術関連資料を一堂に展示している。ニコンの歴史はつまり「レンズ光学」の歴史そのものでもある。レンズの発展の歴史がカメラの発達史でもあり、研究者が堅実に妥協なく磨き上げた技術力の歴史が、第一線の報道現場、宇宙や極地などの過酷な環境での撮影にも同社製品が採用され、NASAなどの世界の専門機関で認められてきた数多くの実績とともに見て取れる。その技術は医療分野や科学技術にも応用されており、展示されている半導体露光装置（NSR-1505G2A)は1984年に開発されたもので、国立科学博物館の定める「重要科学技術史資料」登録の貴重な実機である。

2-2. 富士フイルム株式会社

①富士フイルムフォトコンテスト（1950～）
②富士フイルムフォトサロン （1957～）
③フジフイルム スクエア（2007～）
④“PHOTO IS” 想いをつなぐ。あなたが主役の写真展（2006～）
⑤写真歴史博物館 （2007～）
⑥写真救済プロジェクト（2011～）
⑦フジフイルム・フォトコレクション（2014～）

1934年、写真フィルム製造の国産工業化計画に基づき、大日本セルロイド株式会社の写真フィルム部の事業一切を分離継承して富士写真フイルム株式会社を設立。足柄工場の操業を開始し、写真フィルム、印画紙、乾板など写真感光材料の製造を開始する。2000年、富士フイルムの主力事業であったカラーフィルムなどの写真感光材料の売り上げがピークとなり、その翌年、1960年代初めには売上高で十数倍の差があったイーストマン・コダック社の売上を越える。しかし、デジタルカメラが急激な勢いで普及し、写真フィルム市場は2000年をピークに大幅に縮小し、10年後には世界の総需要がピーク時の1/10以下にまで落ち込む。カラーフィルムなどの写真感光材料は当時富士フイルムの売上利益の2/3を占めていた。そして2007年、富士フイルムの写真事業はかつての売り上げの1/4に激減していたが、この年富士フィルムは史上最高の売上高を記録する。そこには、会社が写真事業、主にフィルム事業の危機に対して短絡的ではない広い視野と長期的なビジョンで取り組んだ大規模な経営・構造改革がある。かつての本業である写真事業を守るために「本業」のみに固執せず、大胆なリストラや新規事業への投資などを含む構造改革を断行し新たな会社としての第一歩を踏み出したのである。2006年、富士フイルムホールディングス株式会社を設立し、二大事業会社 富士フイルム株式会社・富士ゼロックス株式会社を傘下に束ねる持株会社体制に移行。第二の創業として社名変更、同業他社が写真フィルム事業からの撤退を決める中で、写真文化を守ることを宣言する。[8]

その宣言の次の年、2007年に東京ミッドタウン（東京都港区）への本社移転と同時にオープンした「FUJIFILM SQUARE（フジフイルム　スクエア）」はにある複合型ショールームであり、先に挙げた「富士フイルムフォトサロン」と「写真歴史博物館」はこの場所にある。また、応募者全員が参加する写真展「“PHOTO IS”想いをつなぐ。あなたが主役の写真展」や日本写真史という観点からの保存・普及に貢献する「フジフイルム・フォトコレクション」など、経営改革後に始まった活動もある。また、東日本大震災の復興活動の一環として行われた「写真救済プロジェクト」など社会貢献活動にも力を入れている。フイルム事業の縮小にもかかわらず写真文化を守り育てるメセナ活動に取り組んでいることは、それを支える他事業の存在があったからである。大胆な変革と方向転換しつつにより、写真事業から撤退せず、写真文化を守っていったという事実は、改革と守りという対極の両輪の持続こそが企業が生き残るために重要な要素であることを明確に示している。

[8] 「朝日新聞」2006年1月21日「天声人語」（略）…銀塩（フィルム）からデジタルへ、写真の世界で新旧の移り変わりが激しく続いている。コニカミノルタホールディングスが「サクラカラー」の名で知られた写真フィルムなどのフォト事業とカメラ事業から撤退するという。ニコンもフィルムカメラからの事実上の撤退を発表した。こうした流れの中で「撤退しません」という富士フイルムのコメントが目についた。「人間の喜びも悲しみも愛も感動も全てを表現する写真は、人間にとって無くてはならないものであり…その中でも銀塩写真は、その優れた表現力などでデジタルに優る有意さもあり、写真の原点とも言えるものです」。…（略）

「写真文化の発展と心の豊かさ、人々のつながりへ貢献することと写真の楽しみを伝えること」をビジョンとした富士フイルムのメセナ活動は長期的で多岐にわたる。なお、「“PHOTO IS”想いをつなぐ。あなたが主役の写真展」は2015年に、「富士フィルムフォトサロン」「写真歴史博物館」「フジフイルム・フォトコレクション」の活動は、2018年にメセナアワードを受賞している。

①富士フイルム　フォトコンテスト（**1950~**）

1950年から始まった「富士フイルムフォトコンテスト」は、質の高い受賞者を輩出してきた歴史のあるフォトコンテストである。後に、富士フォトサロンや写真歴史博物館で写真展を開いたり、フジフイルム・フォトコレクションとして作品が収集された写真家の受賞もある。現在では、一般のアマチュア写真家を対象とした格式の高いフォトコンテストである。

以前存在したプロフェッショナル写真部門には1955年には土門拳、1957年には木村伊兵衛なども入賞者として名を連ねている。また、1951年にSTUDENT PHOTOの部門で一等を受賞した細江英公は、その後も応募を重ね、プロフェッショナル部門では3回の入賞、審査員も4度務めていることが確認されている。

第一回(1950年)の応募点数は、8,118点。2021年第60回には、29,564点となっている。審査において、応募作品が審査のどの段階まで進んだかという「レベルシール」を採用しており、入賞に至らなくても自分のレベルアップを測ることができる。他社のフォトコンテストにはないこういった施策が応募者に好評を得ている。アマチュア写真家の間では最も幅広い支持を集める大規模なフォトコンテストとして位置付けられ、長年継続しての応募者も多い。

②富士フイルムフォトサロン（**1957~**）

富士フイルムは1957年、写真文化の発信基地として「富士フォトサロン」の名称で東京・銀座にギャラリーを開いた。プロカメラマンのテーマ展からアマチュアのグループ展まで、幅広い展示ラインアップが強みであり特色である。1960年代、写真を専門とする大学や専門学校の卒業制作展示が軒並みに開催されており、それらのことが写真家を志す若い層に門戸を開き、さらにはバックアップする存在としての富士フォトサロンの認知、親和性向上にも大きく繋がっていたと言える。会場は3つに分かれており、一週間ごとに展示替えが行われた。歴史あるギャラリーに相応しく1950年代から開催された展覧会のラインナップは時代と社会情勢を反映しており、現在に至るまでの日本写真史において重要な展覧会もこの場所で開催されたことがわかる。第一章でも述べた、戦後日本写真史の大きな転換期のひとつの起点となった1956年に「人間の土地」で衝撃的なデビューを飾った奈良原一高が、1958年に「王国」を初めて展覧会として発表したのが富士フォトサロンである。このシリーズは奈良原の代表作というだけではなく、日本写真史において極めて重要な作品であり、当時のカメラメーカーによるギャラリーの果たした役割の重要性がうかがえる。

③フジフイルム スクエア（**2007～**）

2007 年には富士フイルムの東京ミッドタウンへの本社移転と同時に、「富士フォトサロン」から「富士フイルムフォトサロン」と改称し、「写真歴史博物館」等を併設し、展示内容を拡充させ「フジフイルム スクエア」としてオープン 。富士フイルムフォトサロンは、展示スペースが内容に応じて分割され（スペース1、2、3、ミニギャラリー）、後述する「写真歴史博物館」も含め常に複数の展覧会を同時期に開催している。入場無料、年中無休（年末年始以外）で営業を行っている。

2017年に10周年を迎えた「フジフイルム スクエア」では、常に多様な企画が同時開催されているが、その企画意図や方針は、社会情勢や時事問題に呼応したもの、大きなイベントに連動したもの、時代のニーズに沿ったものなど様々で、ラインアップの幅広さも特色のひとつである。また、若手作家の育成・支援として2013年から「若手写真家応援プロジェクト」を行っている。2021年10月の取材時、若手写真家応援プロジェクトに参加する30人目の写真家として個展[9]を開催していたJay Hiranoはイギリスを拠点に長年活動してきたが、日本において作品を発表するのは初めてであり、作品選定やプリントは勿論のこと、各種デザインや会場構成・施工に至るまで富士フイルムからの全面的なサポートに大いに助けられたと

[9] Jay Hirano写真展「Lockdown-Recovery, Rebuild, Restart-」2021年10月22日～11月4日　FUJIFILM PHOTO SALON Space2

いう。また、個展開催にあたり最も印象的であったこととして「展覧会場での多くの人との出会い」を挙げ、その恩恵をまさに展覧会場でリアルに実感していると語った。写真を通して人と人をつなぐ、出会いの場を提供するという同社のビジョンがここにも体現されている。

④「**"PHOTO IS"**想いをつなぐ。あなたが主役の写真展」（**2006～**）

「写真を通じて想いをつなぐ」をテーマに2006年にスタートした参加型写真展。本写真展は、応募者全員の作品が、各自の選んだ会場に必ず展示されるというのが基本コンセプトである。根底にあるのは同社が長年提唱し続けている「写真をプリントする、展示する」という写真本来の楽しみを多くの人に実感してもらうことである。人々にとっての大切な瞬間を思い出として形に残し、プリントされた写真を実際に見ることでその想いが共有され、人と人とのつながりを強め広げていくといった写真の力を象徴する同社ならではのコンセプトと言える。

一般的な写真コンテストの参加者シェアを占めるのは、圧倒的に中高年男性であるが、「"PHOTO IS" 想いをつなぐ。あなたが主役の写真展」のこれまでの参加者は0歳から101歳まで、性別年齢問わず幅広い層に写真の可能性を実感してもらうための工夫が随所になされている。写真のあり方が多様化する時代に合わせて、画像をアップロードするだけで応募できる「インスタグラム部門」の設置（最終的には作品を「プリントする」形となっている）、また、新型コロナウイルス感染拡大後の2021年の開催では、応募作品をオンラインでも公開し、オンラインならではの閲覧ができるようにするなど、時代に合わせた新たな取り組みを導入している。会場では、来場者から出展者に対してメッセージを送れる「絆ポスト」という企画が実施されている。来場者が撮影者への手書きのメッセージを届ける仕組みであり、撮影者へのメッセージは展示終了後に郵送で本人に届けられる。毎回好評の企画であり、ここにも人と人をつなぐという同社の姿勢が具現化されている。

⑤写真歴史博物館（**2007~**）

2007年「フジフイルム スクエア」のオープンと同時に、館内に写真文化とフィルム、カメラの歴史的進化を一望できる場を開設。180年にも及ぶ写真文化の変遷をカメラの歴史とその技術開発・進化を通して見ることができる博物館。歴史的に貴重なアンティークカメラや富士フイルムの歴代のフィルムとカメラ製品の数々を通して写真文化の変遷を知ることができる。富士フイルムが開発した世界初のメモリーカード記録式デジタルカメラ（フジックスデジタルスチルビデオカメラDS-1P）などの製品も展示されている。この機種含めいくつかの展示品は「重要科学技術資料」として国立科学博物館による登録認定を受けており、前述の「ニコンミュージアム」でも述べたとおり、写真文化とは芸術分野のみならず科学技術分野においても非常に重要なものであり、各企業がそれに貢献してきた歴史を見ることができる。また、このスペースにおいては、歴史的価値の高い写真を展示する企画展を定期的に開催している。

さらに、特色ある取り組みとして、「写真歴史博物館コンシェルジュツアー」を開催。富士フイルムで実際に写真関連の研究・技術・製品開発に長年関わったOBがコンシェルジュとして毎日ギャラリーツアーを行っている[10]。写真の歴史と企画展についての解説が主であり、各々の専門分野について来館者からの個別の質問に答えたり、そこから会話に花が咲くこともあるという。人と人との出会い、交流の場であるとともに、コンシェルジュの媒介により「写真の技術や歴史」とユーザーを繋ぐ場所として、重要な役割を担っている。

⑥写真救済プロジェクト[11]（**2011～**）

2011年3月11日に発生した東日本大震災、その復旧活動や被災地支援の一環として「写真救済プロジェクト」が立ち上がった。長年写真文化を大切にしてきた同社ができることを、という着想からスタートした企画であったが、震災直後から相次ぐ写真の洗浄方法の問い合わせや、瓦礫や土砂に埋まり泥に汚れた思い出の写真を何とか元の形に戻したいと願う多くの人々の声で、活動は拡大していく。プロジェクトに参加した社員やボランティアが被災地を訪問し、汚れた写真の洗浄方法の指導を行う、洗浄に必要な

[10] 新型コロナウイルス感染拡大前。現在は感染状況に応じた対応が行われている。また、「フジフイルムスクエア　コンシェルジュによる写真歴史博物館のご案内」動画をフジフイルム スクエアWebサイトで公開している。https://fujifilmsquare.jp/guide/museum.html

[11] 参考資料：「東日本大震災の復旧に向けた富士フイルムグループの取り組み」sustainability_activity_report_2011_ff_sr_2011_03.pdf (fujifilm.com))

ツールを詰めたキットを配布する、地域から預かった17万枚もの写真を洗浄して返却するといった幅広い活動が行われた。人々にとっての思い出、それが形として残る写真の力が多くの人々に実感されたとともに、高い品質での再生が可能だったのは、水でインクが流れてしまう家庭用インクジェットプリンターで印刷した写真ではなく、表面にコーティングが施されている銀塩写真であり、写真店でプリントされた写真だったことから、適切な方法で写真をプリントすることの重要性も同時に伝えていく必要性が実感されたという。

⑦フジフイルム・フォトコレクション（**2014~**）

2014年の富士フイルム株式会社創立80周年を機に、「写真文化を守る」ことを基本理念として、幕末・明治から現代まで、日本を代表する写真家101名の記録的価値の高い作品（別紙4）を企業のフォトコレクションとして収集したものである。

作品は幕末から現代まで撮影年代で時系列に構成されている。幕末から現代に至るまでの日本の写真史、技術の革新・変遷と時代ごとの写真家による様々な研鑽・挑戦の歴史を、最高レベルの銀写真プリントで一望、体感できることが大きなねらいであり、富士フイルムが提唱する「写真文化の維持発展に貢献」「写真をプリントすることの意義」が、これらフォトコレクションによって体現されている。

また、写真に造詣の深い層や専門家のみならず初めて写真史に触れる初心者にまで幅広い客層に日本の写真文化を届けることを目的とし、本コレクションは2014年1月に富士フイルムフォトサロン（東京）・富士フイルムフォトサロン大阪で展示された後、以降、全国の公立美術館・博物館含めて8年間で18回（2021年時点）展示され、観客動員数は約2,000,000人を数える。写真を専門とする以外の多くの美術館において、日本の写真史を俯瞰的に見ることのできる機会はコレクションにおいても特別展においてもほとんどないのが現状である。その中で、同社のフォトコレクションは多くの人々にそれらを鑑賞する機会を提供し、文化財としての写真の保存・普及・発展に大きく貢献していると言える。

３．二社の事例から、まとめ

株式会社ニコンは、卓越した技術力、最高品質の製品、最高峰レベルのコンテストといった高いレベルを常に維持しながら世界的なブランドの地位を築いた。製品の質の向上とともに、プロ・アマ問わず優れた写真表現者の育成にも注力し、レベルの高い最先端の表現を全面的にサポートすることで厚い写真家層の保持に貢献し続けている。また、カスタマーサービス、CSR、メセナといった概念もない時代から、高い水準でゼロからその基盤を作り上げた。持続可能な社会貢献のあり方、企業利益やPRからはメセナ活動を独立させる形で高いブランド力を維持する姿勢など、写真界のみならず社会にもたらした功績は計り知れない。

その姿勢には、今再び学ぶことが多いように思える。目先のトレンドや低価格指向に流れ、技術力を失っていく企業が多い中で、究極まで突きつめた技術と大衆に支持される汎用性の高いものを生み出す力をいかに維持するかは課題である。両方が難しければ決して「技術」だけは捨てないこと、技術を徹底的に大事にし将来のために磨きぬく企業であってほしい。そのためには、カスタマー側の目先のみの価値に流されない確かな判断力も同時に問われるところでもある。

富士フイルム株式会社は、写真関連の製品やサービスを年齢性別属性問わず国民的レベルで広く大衆に対して提供してきた。2000年代以降、デジタル化の進展とともに写真フィルムの需要が急減した時も、写真文化を後世に伝えることを使命に写真事業を継続した。そして現在、富士フイルムの全事業の中で、現在写真部門が占める割合はわずか数%である。にもかかわらず、これだけのリソースを写真関係のメセナ活動に投じているのは、社内全体で「写真文化を守る」という使命を共有し、同社の創立以来一貫して行ってきた「写真文化」を守り育てる活動を継承していることの現れである。写真をプリントすることの意義、写真の本質を楽しみと共に多くの人に伝え、写真を通して「人と人をつなぐ」コミュニケーションを促していくための活動は多岐に及び、東日本大震災の事例など文化活動を越えて社会貢献活動にもつながっている。

「人と人とをつなぐ」という同社の姿勢は、今回のインタビューへの対応姿勢にも全面的に現れており、短い時間のインタビューにもかかわらず、それぞれの担当者からそれぞれの言葉で、各業務の企画意図や使命を直接丁寧に説明されたことが印象深く、利益や広報とは本来切り離されたメセナ活動こそが、直接的な利益目的ではなく、人と人を媒介し理念が伝達されるという、何よりも強固なPRとして長い目で見て企業に還元される可能性の一端に触れたようにも思った。

富士フイルムの活動の根幹にあるのは「写真文化を守り、育てる」という使命感である。メセナはビジネスやPRの一環であるか否かといった議論の前に、大前提としてこの使命感が会社全体に浸透していることは重要な点である。2000年代以降のデジタル化の波の到来に伴いフィルムの需要が急減、コダックが廃業し、国内各社もフィルム事業から撤退する中で、富士フイルムが2006年に発表した「写真文化を守る」宣言は、単なる一社の意志表明には留まらない、業界の垣根を超えた重要な意味を持つものであった。写真業界が最も大変であった時代に、写真文化を守り発展させることこそがビジネスを超えた使命であることを内外に強くアピールした2006年は、日本の写真文化の命運を左右するターニングポイントであったといっても過言ではない。

一度失われると再び取り戻すことはほぼできないのが文化である。「写真文化を守ることが使命」との確固たる姿勢はニコン、富士フイルムの両担当者に共通しており、それぞれの形でメーカーとして写真文化へ果たしてきた貢献は、生産してきた質の高い製品の提供のみならず、多角的な文化活動を通して日本の写真界の質の向上と裾野の拡大に直結しており、長期的視野でメセナ活動を継続してきた矜持が感じられる。

しかし課題もある。日本経済にかつての勢いはなく衰退していく中で、過去のカリスマ的人物の威光や成功体験のみに依存していては新たな道は開けない。メセナ活動においても、自ら考え、独自に新しいアイデアを生み出し柔軟に実行、時には方向転換していく組織作りがこれからの時代には不可欠である。ニコンが長い歴史の中で関係を構築しサポートしてきた写真家たちの歴史は、ひとつの日本写真史でもある。ニッコールクラブの運営を長きにわたり写真家に一任してきたという歴史、そして、ニコンのカメラが普及していく中でいち早く写真家たちの要望を捉えて、第一線で活躍するプロフェッショナルとの関係性を構築しながらその市場を固めていったという実績。メセナ活動においても、市場における写真家との関係性においても、ニコンや富士フイルムが先駆けとなり、各社がその背中を追いかけながら日本の写真史は発展を遂げてきたと言える。その関係性と実績を丁寧に詳細にアーカイブし俯瞰、さらには発信できる環境を整えること、時には現在において再び彼らの言葉に耳を傾けることで、現在の課題やその解決へ

の道筋が見えてくるのではないだろうか。
　また、幅広く大衆へアプローチすることがひとつの特色であった時代は終わり、デジタル社会における情報伝達手段としての写真はもはや日常のインフラであり、ツールとしての役割も担っている。富士フイルムの提唱する「写真をプリントすることの重要性」だが、現代は圧倒的に「写真をプリントアウトしない」時代である。その標準が前提での新たな展開を見出すことで、写真の原点である「プリント」の存在意義をもさらに高めることができるだろう。

　「写真文化を守る」という課題の中でもうひとつ浮上するのが、広く一般レベルでの「アーカイブ」としての写真の存在である。写真とは紛れもなく「記録」のメディアであり、人々が日常的に撮影した数々の写真は、その時代をそのまま記録保存した歴史的な「文化資源」であるとも言える。美術館に収蔵されている写真家の作品も各時代の重要な記録ではあるが、それはあくまでも写真家の個人的解釈に基づく断片的なものである。一般の個人的な記録を集積したビッグデータから見えてくる記録の姿は、これまでとは全く違った20世紀の側面を映し出すことは間違いない。それは時の経過とともに、更なる重要性を持つ貴重な資料となるはずだ。同時に、「写真作品」に関連する膨大なネガやコンタクトプリントなども、写真家の意図や撮影背景を読み解くための貴重な研究資料であるが、そのほとんどは整理や調査研究がなされぬまま世代交代とともに廃棄されてしまう現実がある。個人や団体、組織レベルでの取り組みはなされているが、保護されるスピードを遥かに上回る勢いで貴重な資料が散逸・破棄されている。業界や業種の枠を超え、さらには官民連携でこの状況に対処する必要性を感じており、中でも企業メセナがそれを牽引する役割を担うことはできないだろうか。
　ビッグデータの時代、アーカイブやDXの重要性が問われて久しい。歴史を保存し守り、それをオープンにし、真の意味で包括的にそしてDXにおいてインタラクティヴにさらには国境を越えて活用していくことで、現代社会の現在抱えている課題や解決策、そこから新たな可能性も見えてくることを期待する。逆に言えば、歴史の尊重や積極的な情報開示なくして新たな発展はあり得ないだろう。

　そして我々の課題としては、目先の情報に安直に流されないこと。確かな知識とものごとを見極める目を持つことである。肥大化するデジタル時代において、資本確保とメディアコントロールの仕組みさえ作れば、いかようにも表面的な価値づけをし、消費者を動かすことが可能となった。もはや業界レベルの問題ではなく、資本主義・合理主義によって文化の蓄積が淘汰されてしまうという危機に直面しているとも言える。それは我々消費者（鑑賞者）が、目先の誇大広告や真新しさ、安さや利便性のみに流されて来た結果でもある。長期的視野で真摯に良いものを生み出す研鑽が報われなければ、企業はその努力を怠り、消費者のニーズに合わせた安易に利益を生み出すための活動や生産をするようになる。消費者が確かな判断力を駆使していくことで、企業のESGあるいはパーパス・ドリブン経営といったことが本質的な意味で可能となり、短絡的評価のみに囚われない理念と信念を持った経営がコンシューマーの育成とカスタマーとのロイヤリティ構築、長期的な視野において確実に社会に還元されプラスの循環を生むことにつながるだろう。製造業の現場が厳しい状況であるからこそ、企業がメセナ活動を断念することなく時代に適した形で継続できる土壌を支えていく意識を、基本的なメディア・リテラシーとともに我々が自分自身の問題として捉えることが重要である。

　そしてもうひとつ、この問題は改めて取り上げたいが、日本における写真界と美術界との関係性（美術館における写真の扱いにおける課題、と言い換えることもできる）。かつては「写真界」「美術界」という独自の強固な枠組みが存在し、それぞれの業界内部で様々な評価が完結していた。日本における写真文化は写真家や評論家と写真関連メーカーや出版社などが中心となって形成された「写真界」の中で発展してきた。その世界は主に美術館や大学をヒエラルキーの頂点とする「美術界」とは、接点を持ちながらも一線を画し、独立とも孤立ともいえる状態が今日まで継続してきたとも言える。情報手段や表現の変化と共に、その境界が確かな判断基準のないまま揺らぎつつある中で、歴史を無視した評価の在り方が罷り通っていくことは、長期的に見れば各業界に大きな損失を齎すであろう。既存の「美術館」の縦割り構造や存在意義を再考することも含めて、今後はお互いが、背景にあるものや歴史を学び、尊重しながら業界の垣根を超えて連携していくことが必須となるだろう。

「写真」が輝かしい歴史を守りながらも新たな付加価値を持った重要な存在としての道を切り開くことができるか、それはもはや企業個々の問題ではなく、業界、社会全体で取り組むべき大きな課題でもある。時代の変化に後追いで適応するのではなく、さらに一歩先をゆき人々に影響を齎していくような新たな写真の役割を、歴史の継承と革新の両輪でもって、メセナ活動においても写真文化においても、持続可能な形で人々と関係を構築しながら時代を牽引していく新しい企業のあり方を期待したい。

常に現在に対して批評的な眼差しを持ち、ミクロとマクロの両視点で自らと社会との関係を考察すること、時代の一歩先をゆく思考と実践、それらはまさしく戦後日本写真史の黎明期に多くの写真家や技術者、経営者が信念を持って挑戦していたことである。そこから築かれた「写真文化」を今後も継承していくことができるかは、企業の姿勢のみならず、歴史を学びながら新しい視野を持って新境地をひらこうとする一人一人の意志と行動に委ねられている。

別紙1　ニッコールクラブの会長・幹事・顧問の変遷

長岡正男	1952-1969	初代会長
尾崎三吉	1953-1954	
木村伊兵衛	1969-1974	2代目会長
西山清	1952-1983	
土門拳	1952-1990	
三木淳	1952-1970	
	1971-1973	副会長
	1974-1992	3代目会長
亀倉雄策	1952-1997	
伊奈信男	1967-1978	
山村雅昭	1979-1987	
細江英公	1968-1986	
奈良原一高	1968-1986	
稲村隆正	1966-1989	
渡辺義雄	1982-2000	顧問（ニコンサロン名誉館長）
横須賀功光	1974-1985	
三堀家義	1976-1990	
佐藤明	1966-1991	
	1992-1998	4代目会長
	1998-2002	（ニコンサロン名誉館長）
江成常夫	1988-1997	
	1998-2007	5代目会長
土田ヒロミ	1992-2007	
森永純	1974-1996	
宮崎学	1996-1999	
坂田栄一郎	1998-1999	
ハナブサ・リュウ	-2000	
大西みつぐ	-2000	
菅洋志	-2000	
大島洋	2004-2007	
織作峰子	-2007	
海野和男	-2007	
西岡隆男	-2007	6代目会長

引用：『会報でひもとくニッコール物語』p.59

別紙2 「伊奈信男賞」受賞者一覧

第1回（1976年度）	山村 雅昭「植物に」
第2回（1977年度）	深瀬 昌久「烏」
第3回（1978年度）	土田 ヒロミ「ヒロシマ 1945-1978 ＜原爆の子＞の三十余年」
第4回（1979年度）	栗林 慧「螢」
第5回（1980年度）	十文字 美信「蘭の舟」
第6回（1981年度）	伊藤 明德「伊藤明德 原風景」
第7回（1982年度）	英 伸三・桑原 史成「ドキュメント二人展」
第8回（1983年度）	中村 梧郎「Agent Orange 戦場の枯葉剤」
第9回（1984年度）	増田 彰久「アール・デコの館」
第10回（1985年度）	郷津 雅夫「バワリーストリート（昼⇔夜）」
第11回（1986年度）	長野 重一「遠い視線」
第12回（1987年度）	津田 一郎「無名地帯 ー伝来の地」
第13回（1988年度）	鬼海 弘雄「王たちの肖像（浅草寺境内）」
第14回（1989年度）	横須賀 功光「光銀事件」
第15回（1990年度）	尹 胄榮「来世を待つ人々 ーネパール・カトマンズにて」
第16回（1991年度）	榊 晃弘「歴史の街並」
第17回（1992年度）	鈴木 清「母の溟」
第18回（1993年度）	鈴木 邦弘「森の人 Pygmy」
第19回（1994年度）	有野 永霧「空蝉の都市・ヨーロッパ編」
第20回（1995年度）	江口 弘美「植物 Part III」
第21回（1996年度）	南 良和「黄土高原　麦と窰洞（ヤオトン）の人々」
第22回（1997年度）	山内 道雄「HONG KONG 英領香港」
第23回（1998年度）	神村 光洋「ZOO」
第24回（1999年度）	百々 俊二「千年楽土」
第25回（2000年度）	内山 英明「JAPAN UNDERGROUND　地下の迷宮 II」
第26回（2001年度）	山崎　博「櫻花図」
第27回（2002年度）	古屋 誠一「Last Trip to Venice」
第28回（2003年度）	大島　洋「千の顔、千の国ーエチオピア」

第29回（2004年度）	宍戸 清孝「21世紀への帰還 IV」
第30回（2005年度）	下瀬 信雄「結界 V」
第31回（2006年度）	港 千尋「市民の色 chromatic citizen」
第32回（2007年度）	北島 敬三「USSR 1991」
第33回（2008年度）	平敷 兼七「山羊の肺　沖縄1968-2005年」
第34回（2009年度）	太田 順一「父の日記」
第35回（2010年度）	普後 均「On the circle」
第36回（2011年度）	李 尚一「光州　望月洞」
第37回（2012年度）	BRIAN Y. SATO「ごくろうさま：ハワイの日系二世」
第38回（2013年度）	鈴木 吼五郎「鉱山、プランテーション、縫製工場」
第39回（2014年度）	金村 修「Ansel Adams Stardust(You are not alone)」
第40回（2015年度）	奥山 淳志「あたらしい糸に」
第41回（2016年度）	藤岡 亜弥「川はゆく」
第42回（2017年度）	菅野 ぱんだ「Planet Fukushima」
第43回（2018年度）	インベ カヲリ★「理想の猫じゃない」
第44回（2019年度）	岩根 愛「KIPUKA」
第45回（2020年度）	甲斐 啓二郎「骨の髄 / Down to the Bone」
第46回（2021年度）	原啓義「まちのねにすむ」

引用：株式会社ニコンイメージングジャパン　ウェブサイト

別紙3 「三木淳賞」受賞者一覧

第1回（1999年度）	甲野 善一郎「SECRET TIME」
第2回（2000年度）	鈴木 忍「そして、この優しい去勢のために」
第3回（2001年度）	藤沢 真樹子「mango y ritmo」余年」
第4回（2002年度）	呉 雪陽「氷上の花火」
第5回（2003年度）	荻野 育代「緊張の方向」
第6回（2004年度）	村上 友重「球体の紡ぐ線」
第7回（2005年度）	土屋 育子「IMAGES OF TRUST」
第8回（2006年度）	石川 直樹「THE VOID」
第9回（2007年度）	稲宮 康人「『くに』のかたち　HIGHWAY LANDSCAPES OF JAPAN」
第10回（2008年度）	西村 康「彼女のタイトル」
第11回（2009年度）	Gim Eun Ji「ETHER」
第12回（2010年度）	金川 晋吾「father」
第13回（2011年度）	添田 康平「Not yet refugees」
第14回（2012年度）	斉藤 麻子「FIELD NOTE」
第15回（2013年度）	上田 順平「手紙」
第16回（2014年度）	林 典子「キルギスの誘拐結婚」
第17回（2015年度）	阿部 祐己「新しき家」
第18回（2016年度）	清水 裕貴「熊を殺す」
第19回（2017年度）	齋藤 茜「扉は外へつながっている」
第20回（2018年度）	田川 基成「ジャシムー家」
第21回（2019年度）	山下 裕「Cosmetic」
第22回（2020年度）	飯沼 珠実「JAPAN IN DER DDR ー東ドイツにみつけた三軒の日本の家」
第23回（2021年度）	村上 賀子「Known Unknown」

引用：株式会社ニコンイメージングジャパン　ウェブサイト

別紙4　富士フイルムフォトコレクション

1	下岡蓮杖　＜The Far East＞より　1860年代半ば	51	北井一夫 「長崎・平戸」＜村へ＞より　1972年
2	フェリーチェ・ベアト「長崎、中島川」1865年頃	52	田村彰英 「YOKOHAMA」＜午後＞より　1972年
3	上野彦馬「長崎、中島川」1872年頃	53	奈良原一高 「アメリカ・インディアン村の二つのゴミ缶」 ＜消滅した時間＞より 1972年
4	内田九一 「隅田川の舟遊び」1872年	54	森永純 「福岡県能古島」＜波-海＞より　1972年
5	日下部金兵衛 「三保の松原の人力車」1880年代	55	有田泰而 「First Born」1973年
6	小川一真 「百美人」1891年	56	木之下晃 「Alfred Brendel」＜世界の音楽家＞より　1974年
7	鹿島清兵衛 「ポン太」1895年頃	57	原直久 「レ・アール市場跡」＜Paris＞より　1974年
8	福原信三「釣り」＜巴里とセイヌ＞より1913年	58	江成常夫 「スラムのアパートの三人家族7ストリート、東111番地 New York」＜ニューヨークの百家族＞より　1975年
9	塩谷定好 「破船」1929年	59	倉田精二 「池袋・光町大橋近く 東京 池袋」＜FLASH UP＞より　1975年
10	桑原甲子雄 「麹町区馬場先門（現・千代田区）」1936年2月27日	60	杉山守 「ペンジンボトル」＜STILL LIFE＞より　1975年
11	安井仲治 「海濱」1936年	61	秋山亮二　＜津軽 聊爾先生行状記＞より　1976年
12	福原路草 「不詳 新潟・関温泉にて」1938年	62	操上和美 「海を見る」＜陽と骨＞より　1976年
13	田淵行男「初冬の浅間 黒斑山の中腹より」1940年	63	須田一政 「山形 銀山温泉」＜風姿花伝＞より　1976年
14	濱谷浩 「歌ってゆく鳥追い 新潟」＜雪国＞より　1940年	64	南川三治郎 「ジョアン・ミロ」＜アトリエの巨匠たち＞より　1976年
15	岡田紅陽 「東海の松 毘沙門 静岡県」1944年頃	65	石内都 「絶唱・横須賀ストーリー」1977年
16	影山光洋 「手作りの小麦の収穫祝いの食卓」1946年6月25日	66	牛腸茂雄　＜SELF AND OTHERS＞より　1977年
17	林忠彦 「太宰治」1946年	67	深瀬昌久「鴉 金沢」＜鴉＞より　1977年
18	杵島隆 「老婆像」1948年	68	前田真三 「麦秋鮮烈」1977年
19	植田正治 「パパとママとコドモたち」1949年	69	中村征夫 「海軍コマンドに憑かれた男たち」1978年
20	木村伊兵衛 「秋田おばこ 秋田・大曲」1953年	70	山崎博　＜HELIOGRAPHY＞より　1978年
21	渡辺義雄 「内宮正殿北西側全景」＜伊勢神宮＞より　1953年	71	北島敬三 「新宿二丁目のゲイボーイ」＜東京1979＞より　1979年
22	岩宮武二 「マヌカン」1954年	72	水越武 「天に登る光跡 カラコルム・パキスタン」1979年
23	大竹省二 「ヘルベルト・フォン・カラヤン」1954年	73	入江泰吉「斑鳩の里落陽 法隆寺塔」1980年頃
24	大辻清司 「陳列窓」1955年	74	大西みつぐ「根津」＜Wonderland 1980～1989＞より 1980年
25	田沼武能 「真知子巻きでお使い 東京・佃島」1955年	75	島尾伸三 ＜生活＞より 1980年
26	鋤田正義 「母」1958年	76	普後均「暗転」シリーズより 1980年
27	石元泰博「シカゴ 子供」 ＜シカゴ、シカゴ＞より　1958-61年	77	ハービー・山口「GALAXY, London」1981年
28	長野重一 「5時のサラリーマン 東京・丸の内」 ＜ドリームエイジ＞より　1959年	78	伊藤義彦 「Imagery 72-82011, 1982」1982年
29	川田喜久治 「日の丸」＜地図＞より　1960年	79	山沢栄子 「What I'm doing #24」＜What I'm doing＞より　1982年
30	細江英公 「薔薇刑 #32」1961年	80	清家冨夫　＜Portrait of ZOE＞より　1982年
31	芳賀日出男「正月と盆 横手万歳」1962年	81	長倉洋海 「一人、山上で本を読む戦士マスードアフガニスタン」1983年
32	緑川洋一 「瀬戸内海・島と灯台」1962年頃	82	築地仁 「写真像 #55」＜写真像＞より　1984年
33	富山治夫「過密」＜現代語感＞より　1964年	83	水谷章人　＜白銀の閃光＞より　1984年
34	白籏史朗「冬の晨 箱根姥子」1965年	84	宮本隆司 「解体中の有楽座、日比谷映画劇場から三信ビルを見る」＜建築の黙示録＞より　1984年
35	高梨豊　＜東京人＞より　1965年	85	広川泰士 「sonomama sonomama #26」1985年
36	立木義浩　＜舌出し天使＞より　1965年	86	上田義彦 「Robert Mapplethorpe」1986年
37	坂田栄一郎 ＜Just Wait＞より 1966年	87	伊奈英次 「在日沖縄米軍楚辺通信所」＜ZONE＞より　1986年
38	桑原史成「“生ける人形”とも言われた少女」＜水俣＞より 1966年	88	竹内敏信「 ファイヤーカーテン 三原山」1986年
39	篠山紀信　＜誕生＞より　1967年	89	三好耕三 「本荘」 ＜Picture Show 傍観＞より　1986年
40	土門拳 「弥勒堂釈迦如来坐像左半面相」＜室生寺＞より　1967年	90	星野道夫 「夕暮れの河を渡るカリブー」1988年頃
41	広田尚敬 「C57動輪 秋田・土崎」 1967年	91	今道子 「タコ＋メロン」1989年
42	小川隆之　＜New York Is＞より　1968年	92	柴田敏雄 「新潟県北魚沼郡湯之谷村」＜日本典型＞より　1989年
43	久保田博二 「沖縄」 1969年	93	田中光常「オウサマペンギン サウスジョージア島」1992年
44	土田ヒロミ 「愛知 一色黒沢」＜俗神＞より　1969年	94	齋藤亮一 「スズダリ ロシア共和国」 ＜NOSTALGIA＞より　1993年
45	十文字美信 「Untitled」＜首なし＞より　1971年	95	潮田登久子 「東京 世田谷」＜冷蔵庫／Ice Box＞より　1994年
46	鈴木清 「女、川崎」＜流れの歌＞より　1971年	96	瀬戸正人 「渋谷」＜Silent Mode＞より　1995年
47	荒木経惟　＜センチメンタルな旅＞より　1971年	97	野町和嘉 「ライラトル・カドルの礼拝 メッカ」1995年
48	沢渡朔　＜NADIA＞より　1971年	98	秋山庄太郎 「薔薇」より　1996年
49	東松照明 「波照間島」1971年	99	佐藤時啓 「光—呼吸 #275 Koto-ku Aomi」1996年
50	森山大道 「三沢の犬」1971年	100	白岡順 「フランス、ニーム」1999年7月13日
		101	鬼海弘雄 「歳の祝いの日」＜PERSONA＞より　2001年

引用：富士フイルム株式会社ウェブサイト

別紙5 「写真新世紀」過去の受賞者・審査員一覧

	審査員	グランプリ	優秀賞			審査員	グランプリ	優秀賞
1992年（第1回～第4回公募）	荒木経惟 飯沢耕太郎 南條 史生	木下 伊織	岩崎 昌弥 小川 嘉朗 奥谷 佳子 オノデラ ユキ 今 義典 清水 麻弥 辰本 まこと 千葉 鉄也 ノニータ(谷野浩行) 野村 浩 山本 美奈		2000年（第21回・第22回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 横尾 忠則 ジル・モラ 倉石 信乃	中村 ハルコ	佐藤 篤 佐野 方美 澤田 知子 鈴木 良 谷口 正典 中村 年宏 山田 大輔
1993年（第5回～第8回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生	市川 綾子	遠藤 年勇 大橋 仁 金城 民子 河野 安志 高橋 ジュンコ 土井 弘介 中山 英輔 西 光一 野村 浩 宮本 知保 茂木 綾子		2001年（第23回・第24回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 木村 恒久 都築 響一	該当なし	今井 紀彰 佐伯 慎亮 新沢 もも たけむら 千夏 中谷 理子 中西 博之 西郡 友典 吉岡 佐和子
1994年（第9回・第10回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 ロバート・フランク 坂田 栄一郎	熊谷 聖司	大森 克己 小倉 英三郎 金子 亜矢子 白土 恭子 ジャン＝クロード・ベレグー リン・デルピエール		2002年（第25回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道 マーク・リブー 東松 照明	吉岡 佐和子	岡本 英理 鍛治谷 直記 SABA(高橋 宗正、中島弘至) ヨシダ ミナコ 吉本 尚義
1995年（第11回・第12回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 ジャン＝クロード・ルマニー 浅葉 克己	ヒロミックス	A・R・T Puff 坂本 浩 佐内 正史 柴原 三貴子 野沢 文子 パトリシア・ガバス 本田 かな		2003年（第26回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道 鈴木 理策 マーティン・パー	内原 恭彦	植本 一子 加藤 純平 藤田 裕美子 法福 兵吾 ヤマダ シュウヘイ
1996年（第13回・第14回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 伊島 薫 椎名 誠	野口 里佳	加藤 直司 菅野 純 黒瀬 英文 蜷川 実花 早船 ケン 吉田 優 ロス・バン・ホーン		2004年（第27回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道 ケビン・ウエスティンバーグ やなぎ みわ	椎名素代（川村素代） 滝口 浩史	大庭 英亨 ふじい あゆみ 山下 豊
1997年（第15回・第16回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 リー・カシン 森山 大道	矢島 慎一	伊藤 トオル ヴァレリー・ベラン 慶 高城 典子 山本 香 山本 耕司		2005年（第28回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道 ウィリアム・エグルストン 蜷川 実花	小澤 亜希子	新垣 尚香 梶岡 禄仙 とくた はじめ 西野 壮平 松村 康平＋林口 哲也
1998年（第17回・第18回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 ベルナール・フォコン ホンマ タカシ	柏 亜矢子	池田 宏彦 岩崎 マミ 黒瀬 康之 佐藤 純子 ヴェロニック・ジリア 藤原 江理奈 守田 衣利		2006年（第29回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道 ボリス・ミハイロフ 日比野 克彦	高木 こずえ	喜多村 みか＋渡邊 有紀 清水 朝子 Palla 辺口 芳典 山田 いずみ
1999年（第19回・第20回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 サラ・ムーン 長野 重一	安村 崇	伊賀 美和子 遠藤 礼奈 岡部 桃 田邉 晴子 長尾 智子 矢ヶ崎 祐子 吉田 優		2007年（第30回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 森山 大道 榎本 了 壱具 本昌	黒澤 めぐみ 詫間 のり子 中島 大輔	青山 裕企 田福 敏史 中里 伸也

2008年（第31回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 榎本 了壱 大森 克己 野口 里佳	秦 雅則	岡部 東京 小山 航平 菅井 健也 保谷 綾乃 元木 みゆき		2015年 （第38回公募）	フリッツ・ヒールス ベルフ 荒木 夏実 澤田 知子 さわ ひらき 清水 穣 野口 里佳	迫 鉄平	新垣 隆太 岸 啓介 HALKA 松本 卓也 三田 健志
2009年（第32回公募）	荒木 経惟 飯沢 耕太郎 南條 史生 榎本 了壱 蜷川 実花	クロダミサト	Adam Hosmer 杉山 正直 高橋 ひとみ 安森 信		2016年（第39回公募）	アンナ・ダネマン エリン・オトゥール オサム・ジェームス・中川 澤田 知子 さわ ひらき 柴田 敏雄 清水 穣	金 サジ	河井 菜摘 金 玄錫 櫻胃 園子 高島 空太 松井 祐生 松浦 拓也
2010年（第33回公募）	大森 克己 佐内 正史 椹木 野衣 清水 穣 蜷川 実花	佐藤 華連	齋藤 陽道 柴田 寿美 高木 考一 谷口 育美		2017年（第40回公募）	アレック・ソス サンドラ・フィリップス ダヤニータ・シン 上田 義彦 さわ ひらき 澤田 知子 清水 穣	トロン・アンステン & ベンヤミン・ブライトコプフ	214 澤田 華 ジャンカルロ・シバヤマ 喰田 佳南子 溝渕 亜依 山口 梓沙
2011年（第34回公募）	大森 克己 佐内 正史 椹木 野衣 清水 穣 ヒロミックス	赤鹿 麻耶	奥山 由之 木藤 公紀 パトリック ツァイ 山田 真梨子		2018年（第41回公募）	エミリア・ヴァン・リンデン サンドラ・フィリップス さわ ひらき 澤田 知子 椹木 野衣 杉浦 邦恵 安村 崇	Song-Nian Ang	内倉 真一郎 岡田 将 佐々木 香輔 デレク・マン（萬梓雋） 別府 雅史 山越 めぐみ
2012年（第35回公募）	大森 克己 佐内 正史 椹木 野衣 清水 穣 ヒロミックス	原田 要介	柿田 真吾 吉楽 洋平 長谷波 ロビン 浜中 悠樹		2019年（第42回公募）	リネケ・ダイクストラ ポール・グラハム 安村 崇 瀧本 幹也 サンドラ・フィリップス ユーリン・リー 椹木 野衣	中村 智道	江口 那津子 遠藤 祐輔 幸田 大地 小林 寿 田島 顯 吉田 多麻希
2013年（第36回公募）	大森 克己 佐内 正史 椹木 野衣 清水 穣 ヒロミックス	鈴木 育郎	安藤 すみれ 海老原 祥子 水野 真 藪口 雄也		2020年（第43回公募）	ポール・グラハム オノデラユキ 椹木 野衣 清水 穣 瀧本 幹也 野村 浩 安村 崇	樋口 誠也	金田 剛 後藤 理一郎 セルゲイ・バカノフ 立川 清志楼 宮本 博史 吉村 泰英
2014年（第37回公募）	大森 克己 佐内 正史 椹木 野衣 清水 穣 ヒロミックス	須藤 絢乃	草野 庸子 南 阿沙美 森本 洋輔 山崎 雄策		2021年（第44回公募）	ライアン・マッギンレー オノデラユキ 清水穣氏 グウェン・リー 椹木野衣 安村崇氏 横田大輔	賀来庭辰	宛超凡 テンビンコシ・ラチュワヨ 光岡幸一 ロバート・ザオ・レンフィ 千賀健史 中野泰

引用：キヤノングローバル「写真新世紀」ウェブサイト

参考文献

『ニコンサロンブックス23　伊奈信男賞20年　ニコンサロンにみる現代写真の系譜』株式会社ニコン・ニッコールクラブ、1996年
『ニコンサロンブックス27　現代写真の系譜』株式会社ニコン、2000年
『ニコンサロンブックス28　現代写真の系譜ーⅡ』株式会社ニコン、2001年
『ニコンサロンブックス29　ニッコールフォトコンテストの歩み1978-2002』株式会社ニコン・ニッコールクラブ、2002年
『ニコンサロンブックス32　写真に帰れ　伊奈信男写真論集』株式会社ニコン・ニッコールクラブ、2005年
『会報でひもとくニッコール物語』株式会社ニコンイメージングジャパン、2012年
『写真展案内はがきで綴る半世紀』株式会社ニコンイメージングジャパン、2017年
『写真家　三木淳と「ライフ」の時代』須田慎太郎、平凡社、2017年
『ニコン100年史Ⅰ』『ニコン100年史Ⅱ』株式会社ニコン、2018年

『魂の経営』古森重隆、東洋経済新報社、2013年
『富士フイルム株式会社　創立80周年記念コレクション　フジフイルム・フォトコレクション展』富士フイルム株式会社、2016年
「2017年度活動報告書　フジフイルムスクエア　開館10周年記念版」富士フイルム株式会社 宣伝部、2018年
「フジフイルムスクエア　2018年度活動報告書」富士フイルム株式会社 宣伝部、2019年
「フジフイルムスクエア　2019年度活動報告書」富士フイルム株式会社 宣伝部、2020年
「フジフイルムスクエア　2020年度活動報告書」富士フイルム株式会社 コーポレートコミュニケーション部　宣伝部、2021年
『チャランケ物語　富士フイルム 変革「敗戦」記』神谷隆史、ファーストプレス、2021年

『日本写真の転換　1960年代の表現』東京都写真美術館、1991年
『戦後写真史ノート　写真は何を表現してきたか』飯沢耕太郎、中公新書、1993年
『日本写真史（上）幕末維新から高度成長期まで』鳥原学、中公新書、2013年
『日本写真史（下）安定成長期から3・11後まで』鳥原学、中公新書、2013年
『日本写真史1945-2017』レーナ・フリッチェ著　飯沢幸太郎日本語版監修、青幻舎、2018年
『時代を写した写真家100人の肖像　上巻』鳥原学、玄光社、2018年
『日本現代写真史1945−95』日本写真家協会編、平凡社、2000年